

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 小山 弓弦 葉

本論文は、現在「幻の染」と語られることがある「辻が花」(もしくは「辻が花染」)を対象に、その価値と存在形態の認識の変遷をダイナミックに分析した文化資源学的な研究である。著者は風俗史からの言及や日本染織史の研究水準を手際よく整理するとともに、室町時代から江戸時代にわたる文献史料に記された「辻が花」の形態的特徴と、各地博物館や大学に所蔵されている「辻が花裂」や、小袖や胴服など「衣類」としての伝存、また「幡」や「打敷」など寺院で使用される形での残存など、総計 299 点の徹底したリスト化と調査を行った。「辻が花」の衣服としての変遷や「裂」としての再流通、研究者やコレクターの役割、現代染色作家と呉服業界の関与など、この文化の形成に関わった資源や主体の分析をして、その動態を総合的に描きだしている。

「はじめに」において、中世と現代の技法の差異、近代の概念形成にはらまれた問題点など、「辻が花」という素材に内在する主題が明らかにされる。第一章では、戦前の染織史研究者が「辻が花」をどう捉えてきたか、また東京国立博物館の工芸課染織室を中心とした戦後の染織史研究でどう論じられてきたかが整理され、第二章では 15 世紀の『蝸川親元日記』から 19 世紀の『海録』までの文献史料における記述から、着用の季節、形状、着用した人物、色、模様などが検討される。とりわけ『日葡辞書』の原文の再検討から「摺り染」という特質を引き出している点が面白い。第三章では、図版集や展示図録などをもとに伝存する「辻が花」と称される資料を、名称、材質、形状、所蔵機関などを整理した一覧表にまとめ、小山自身が実物を調査した「辻が花裂」104 点については、技法と材質、色と模様など精査した分析を加えている。さらに「表具裂」や「幡」の形状で残されるものなどを視野に入れながら、「辻が花」と称されたモノの歴史的な存在形態に迫っている。第四章では、近代に焦点をしばり、明治期における有職故実の風俗考証や工芸的な染織の研究、野村正治郎のコレクションや古裂コレクター市場の形成、吉川観方の扮装写生会や京都の歴代服装行列などの関与が論じられ、第五章では戦後の文化財指定や、美術本の役割、さらに現代作家の「辻が花」ブームが付け加えたものなどが多面的に取り上げられる。そして「むすび」において小山は、「モノ」としての「辻が花」の技法的な特徴の近世における断絶という問題に立ち向かい、近代において蒐集や研究に携わってきた主体が使い、呉服産業などの場でも流布するようになった「ことば」としての「辻が花」の意味の拡大が、その矛盾を見えにくくすると同時に、神話化してしまっことを明らかにしている。

文化資源学としての更なる洗練と展開とは今後の展開を期待したいが、「辻が花」の形態資料的な特質を軸に、伝存の素材やそれをめぐる言説を資源として活かす、新たな視点と方法とを提示した本論文は、本専攻の成果の一つである。本審査委員会は、博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。